

第2回 いきいきプラン推進委員会 議事録

日時 平成26年10月31日(金) 13:00～15:00

会場 スマイルなかの3階AB会議室

1. 開会

委員長：第2回の推進委員をはじめさせていただく。今回の委員会の目標の一点目は重点目標①「多様な交流の場づくりを進める」と重点目標②「幅広い層が担い手になる」についての具体的な取り組みについてグループ討議をし、出された意見を下半期の活動につなげるということである。この重点目標①と②は今回の計画における住民活動の中心である。住民活動をひろげるために何が必要か共有化し、下半期の取り組みに活かしたい。

二点目は重点④「解決しにくい課題にみんなで取り組む」で、実際に社協への相談であった事例を共有化し、地域福祉推進フォーラムの在り方とそこで取り上げる新たな課題について確認する。

私自身、区の基本構想で、今後10年の区の在り方について意見を取りまとめる委員となった。ここでの議論もぜひ参考としたい。

では事務局より、資料の確認をする。

事務局：事前配布資料、当日配布資料の確認

2. 協議事項

(1) 重点目標①「多様な交流の場づくりを進める」

重点目標②「幅広い層が担い手になる」についての意見交換

委員長：それでは本日の協議事項に入りたい。まず資料1について事務局より説明をお願いしたい。

事務局：資料1の説明

それではこれより40分間、テーマ①「地域や人とつながりにくい単身の男性が参加しやすい場づくりとは」と、テーマ②「期待しているシニア層や若い世代へのアプローチについて」の二つのテーマについてのグループ討議を行う。進行は各グループの職員が担当する。委員各位には今後取り組むべき課題、アプローチの仕方などについてご意見をいただきたい。最後に各グループでどのような意見が出たか、ホワイトボードに書き全員で共有化し、今後の取り組みに活かしたい。

事務局：重点目標①②はいきいきプランの基礎をなすものである。土壌がないと、その次のみんなで課題に取り組むという流れにならないと考えている。実際皆様が活動する中で考えられていること、こういった取り組みを社協に行ってほしいといったことや、逆に自分たちでこういう取り組みを行いたいといったこともあるかと思うので、情報交換も含め、グループ討議を進めていただきたい。

—グループ討議—

事務局：早速だが、発表に参りたい。ではAグループから順に発表とホワイトボードへの記入を行っていただきたい。

Aグループ：Aグループで討議したところ、サロン活動に日頃参加しない方をどう呼び込んでいくのか、どういう人に担い手になってもらうのかという議論を中心とし、参加者・担い手をど

うサロンに呼ぶのかという話題で話が進んだ。

なかなか参加しにくい層、例えば男性・一人暮らしというような人をどのようにサロンのような場に呼び込んでいくかについてだが、例えば要支援でデイサービス行くほどでもないという方をケアマネが呼び込んでくる、あるいは民生委員や地域の協力者が情報提供ばかりではなく、手を引いて誘って参加を促すというような力があると集まりやすいのではという意見があった。ただなかなか出て来ない男性、そもそもドアを開けてくれないというような方には、誘うというほかに、興味がわくような内容を考えていく必要があるのではないかと。それはマージャンだったり、食べ物だったり、あるいは健康に関わる、例えば何かの検査やトレーニングといったようなプログラムで興味を引くことができるのではないかと意見が挙がった。

担い手については土曜、日曜に開催しているサロンが少ない。土日のサロンが実際開かれるということになると、日頃平日に活動しているボランティアの方は活動が難しいだろうと思われる。しかし逆に日頃平日には地域活動に関わっていない人が土日にサロンのボランティアに参加することで新しい担い手を呼び込むことができる。日頃自分の趣味などの活動をされている高齢者の方も土日のサロンであれば参加者として新たに呼び込めるのではないかと意見が出た。

他に出ていたアイデアとしては、子どもと高齢者の交流である。学校の活動の中にもっと高齢者が参加できないかという意見が出た。学校に対して、子どもに対する支援への協力ばかりではなく、例えば運動会の種目の中に高齢者が参加できる種目を設ける、といったような形で協力をお願いできないかというアイデアである。スポーツジムに通う高齢者は多い一方で、地域の運動会は小さくなっていくというミスマッチが地域で生じている。今後は何か地域で一丸となって目指す目標、子どもの支援や防災といったような地域のエネルギーが集まるようなテーマに基づく新しいイベントなどが必要となってくるのではないかと。

A グループはこのような議論となった。以上。

事務局：では続いて B グループにお願いしたい。

B グループ: B グループでは特にテーマ①に集中して議論をした。なかなか地域とつながりにくい方、特にこのグループでは男性がどうしたら地域につながるかについて、グループの皆さんの日ごろの活動や、感じるところを中心に話した。

地域の現状としては定年退職後、地域に戻っても外とのつながりががないために引きこもっている人が多い。ではどうしたらそういう人が出て来ることができるのか。夫婦で健在の方は良いが、一人の方は民生委員が訪問してもなかなか出て来てくれない。こういう方への対策として、「三つの関わり」を作るといいのではという意見が出た。イベントなどの行く場所があることが一つである。もう一つは何らかのきっかけを作りながら、身近な人、親しい人が手を引っ張っていくということである。そして最後の一つは背中を押すような役割をするということである。この三つの関わりをもっていくことが必要なのではないかという意見が出た。もともと人と関わりたくないという人は少ないのではないかと。今述べたような三つの関わりさえあれば、外に出てみたいという人は多いのではないかと。一つの事例として、名刺を作るという事例があげられる。男性は長い間会社生活をしているが、一旦、定年退職すると自分のプロフィールやアイデンティティなどを示すものが無くなることへの寂しさや自信のなさのようなところがあるのではないかと。一つの方法として地域活動をする際に所属しているグループの名刺などを作り、そういった名刺を交換することで自信をもって参加することができるという事例が挙がった。

次に、一人暮らしの高齢者には訪問をしてもらうということはあっても、誘ってもらえないと外へ出るのはなかなか難しいという話が出た。サロンに限らず、地域に会社に代わるような第三の居場所のようなものを作っていく必要がある。また、世間話ができるような人が周りに必要なのではないかと、構えずに話ができる場所や人が必要である。特に男性はプライドが高いということがあるので、うまく持ち上げながら、さきほどの名刺などのアイテムも使いながら、地域に引っ張り出していくことが必要。誰か、背中を押したり、手を引っ張ったりする役割をしている人がいれば、地域に出てくる人はたくさんいるのではないかと。

また、すでにできているサロンについては参加すると言っても知り合いの方同士が多い気がするので、男性にしても女性にしても新規での参加はしづらい。現状として、社協のサロンは初回の場合は職員が同行しながら参加につなげているが、そういったところの工夫も必要ではないか。あと、南中野で開催されているママカフェについての話があった。乳幼児対象のサロンだが、地域で子育て経験のある高齢女性が、赤ちゃんが抱っこできるから楽しいという楽しみをもって参加されている。このように参加する楽しみのようなものが必要なのではないかという意見が出た。

若い世代については、若いころから地域とのつながりをつくっておくことが大切である。例えばおやじの会のように子どもを通じて、または防災、夜警などの機会に地域とつながっておくことが大切なのではないか。以上。

事務局：では続いてCグループにお願いしたい。

Cグループ：我々Cグループもテーマ①とテーマ②と共通するような話が展開した。男性が参加しやすい場ということだが、南中野ボランティアコーナーのランチのつどいについて事例として挙げた。一人暮らしの男性の方に直接声掛けをし、みんなでランチをとるということを実施している。その時は女性の参加者は募らず、参加者は男性のみ。参加者に女性がいると、女性同士だけで話をするので男性はその場ではポツンとしてしまう。男性だけの集まりには、男性同士ならではの楽しみ方がある。例えば酒を飲むなど、男性だけの集まり方がある。また、ひきこもりがちの方は情報弱者でもあるので、ランチのつどいでは、食事の後に、情報提供や勉強をする場を設けている。重要なのは役割があるということではないか。男性は自分に何か役割が与えられていると、その場に来やすい。あるいは、自分はこれを今やりに来たとして割り切ることができる。高齢の方もそうでなくても、ポツンとなってしまうとつらい。だから、役割を明確に提示して、これをお願いしますという風にするとうちが参加しやすいのではないかと意見が出た。やはり様々な人生経験を積まれた男性なので、本人は特技とっていないことでも周りの人から見ると、そんなことができるのかという特技を持つ方もいる。だから、そんなことだったら言ってくればよかったのというようなこともあるのではないかと思う。しかし、こちらはその人がそういう特技を持っているということは知らないし、その人も地域でその人の持つ特技が役立つとは思っていない。そういった方を引き込むということに難しさを感じる。

そこから関連してテーマ②について。富士見中で20数年前におやじの会が創られた。それはとある事件がきっかけで、父親たちが自らそういうことをやっていたらいけないということに気づいて創られた。動機づけが大切である。自分たちが活動しなければいけないという、みんなで共有化できるような課題があったので、今でもおやじの会は続いていて、仕事をリタイアされた方にも地域で居場所があるという状態になっている。また、北海道伊達市の事例も挙げた。地域に住んでいる方々に何ができるのか、どんな特技があるのかということを知りたいという活動がある。何か困っていることは

ありませんか、という聞き方ではなく、あなたは何かができますかという聞き方をするのである。すると小学生も、それを聞いている大人たちも、こういう人たちが地域にいるのかということがわかるし、一方で地域の方々は自分の情報をオープンにすることで地域とつながるきっかけとなる。若い世代、シニア層の活動の聞き取り方について、何かができますかという聞き方はヒントとなるかと思う。

あとは地域と地域にある施設のつながりという話も挙げた。日頃から地域の施設をもっと知ろうという話が出た。施設を知ってもらい、体験してもらいということをもっと進められないだろうか。地域の中には男性利用者が少なくなっているグループホームもある。利用者と担い手は表裏一体の存在であるから、利用者へのアプローチ次第では担い手と見ることができる方もいるのではないか。そのような働きかけ方もあるのではないか。以上。

事務局：三つのグループそれぞれからの発表を終え、本来であればここで意見交換の時間としたいところだが、時間の都合上、局長と委員長より意見をいただく。

事務局長：委員の皆様は日頃地域で活動されている方ばかりなので、話し合いの内容は共感するような内容ばかりだったのではないかと思う。多様な場づくりと幅広い参加を促すということは、一体のテーマだと思う。場づくりとは現在の課題から考えると身近なコミュニティづくりに他ならないと思う。そしてそのコミュニティも一様ではなく多様な形のコミュニティでいいのだということが皆さんの実体験からもうかがえる。男性は長年、組織的・社会的なところで暮らしを積み重ねてきた方々。そういった形状記憶を急に変えることは難しい。だとすれば、地域の方が少しそれに合わせた用意立て、環境立てをすることになるのではないか。具体的な工夫としては名刺や役割、ミッションを明確にすると良いと思う。会社のミッションとは異なるが、コミュニティのミッションで自分がいきいきできるのだということが少しでも確認できるとまたそれに邁進し、次なる人材となっていくのではないか。以上。

事務局：では最後のまとめを委員長よりお願いしたい。

委員長：元気な高齢者、シニアづくりということはどこでも話題になっている。しかし一方で行政としてはなかなか手を打てないという現実がある。先ほど中野区基本構想に関わる委員を務めているという話をしたが、基本構想の事務局に依頼し、データを出してもらった。2015年は75歳以上と65～74歳の方の人数がそれぞれだいたい35,000人で同じとなる。5年後は75歳以上が約40,000人、65～74歳の人数は約33,500人となる。10年後には75歳以上は約45,000人となり、65～74歳の人数は28,000人となり一気に減る。つまり今後5年後10年後は75歳以上の高齢者が増えてくる。全国的にそのような傾向である。75歳以上の健康な高齢者が非常に大きなポイントとなるということがデータを見てもわかる。よって、皆さんが議論した点についてはターゲットを絞りながら話を広げていく事が必要ではないかと思う。

場づくりということはとても重要であり、まずは場所の数が足りない。多様な場所が必要である。例えば施設、これは策定委員会でも出ていたが、特別養護老人ホームに外の人が行って話をしても勉強になる。これは中野でも、外からグループホームを訪問するサロンを学生が行っている。そのような多様な場所を具体的にどのようにして作っていくかということが課題となる。参加の仕方も多様でいいのではないか。趣味のサークルでも良いと思う。カメラが好きな人、歴史が好きな人、歩こう会でも良い。様々な場所を用意して、それぞれに選択してもらいということが必要なのではないか。

次にその内容である。先日地域の方に頼まれ講演に行った。参加者はシニアの方80名ほどで、そのうち男性は20名ほどであった。その際、どのくらいの方が料理をすることができるのか挙手をしてもらったところ、男性は一人も手を挙げなかった。日本の男性は依存的である。自立をさせた方が良い。データを見ると、都市部は男性介護者が3割存在する。老老介護とな

ると、どちらが介護をする側になるかはわからない。また、親の介護を子どもが行うという場合もある。家事ができない人が介護をすることは難しい。料理だけでパニックになってしまう。これからの時代は男性の家事能力、介護能力を高めることが必須であると考えられる。施設などで行われる介護教室などはとても重要である。今後は時代にあわせてどういう場をつくるのかということに関して、どういうニーズがあるのかを社会環境から見てプログラムを作っていく、その過程で専門職が協力していくということが重要である。

担い手に関しては役割が必要だという意見が出た。市民後見人も含めて、その人の持っているものに合った役割を開発していく事がとても重要である。中野にも優秀な方は多くいらっしゃると思うので、社協も含めて多様に考えていく事が必要である。多様な担い手という今回若い世代の方についての議論をする時間が足りなかったのであろうか。中野の若い層の活用についてはまだまだ工夫が必要だと思われる。先ほどの話の中にも出ていたおやじの会や、防災会、スポーツなど若い時から活動しておくことも大切である。難しいが、若いうちから地域で活動していないと、なかなか急には地域の活動に参加しづらい。テレビで静岡は健康寿命が長いということをやっていた。静岡県の金谷町での取り組みが参考になったが、金谷町では高齢者に行事のカレンダーを配布し、行事に来ない場合は保健師が迎えに行く。これは別に保健師でなくても、町会の役員や民生委員、事業者、社協でも良い。地域の中で行事のカレンダーがあって、選択をして参加をするようにし、孤立をさせないということが、これからは大切なのではないかと。2020年には4万人になる75歳以上の高齢者が参加する場所が真に必要なのである。丁寧に、いろんな関係者が手を組んで行う必要がある。地域では社協が取り組んだ方が良い。きめ細かく話をする事ができるし、実際地域へ出かけて行き、地域にどういう場所があるといいのかを聞いてくることもできる。住民の知恵を聞きだし、具現化する、そのためのヒントとなる良い話が今日は聞けたのではないかと思う。

事務局：今日いただいたご提案は、次回の推進委員会にて、来年度の具体的な取り組みについて議論する際参考としたい。

(2) 重点目標④「解決しにくい課題にみんなで取り組む」

事例報告～母子世帯の進学支援と外国籍の母親の孤立（教育支援資金の貸付事例から）～

委員長：では二点目の協議事項に入る。まずは事務局より今回の事例報告の目的をお話しいただきたい。

事務局：社会福祉協議会でなければ取り組むことができない課題について、今後もこの場でご意見をいただきながら解決に向けて、皆さんと一緒に考えていく場にしていきたいと思っている。中野社協では毎月1回相談担当者会を開催し、それぞれの部署で受けている相談の中から困難ケースについての検討を行っている。その中で協議をしている一つのケースとして生活福祉資金の相談として受けているケースを担当者よりご紹介した上でご意見をいただきたい。

事務局：資料2について説明。

委員長：制度の問題は今回初めて知った。民生委員はケースごとに相談者の性別によって男性女性交代できるのか。

委員：そのようなことはできない。生活状況の調査をしたり、普段の生活で知っていることをケースワーカーに報告するということはできる。もし私がこのケースの担当民生委員だったら相談者宅を訪問して確認し、こんな状況にならないうちに対応したいと思う。

委員長：担当民生委員も気になっていると思う。ただ一人で訪問するのは難しいというのであれば、社協職員とともに訪問するという方法もあるのではないかと。

委員：他の方が行ってはいけないということではないので、隣の地域を担当する民生委員が行くなどということではできると思う。こんな風になる前に何とかならなかったのかと思う。

委員長：母親の体調や、周りとなじめないというところも気になる。それが原因で娘に対していい対応ができないということもあるのではないかと思われる。日本社会になじむプロセスとしてはコミュニケーションしかない。しかし、単純に日本語教室だけでよいというわけにはいかない。国際交流協会の方に関与していただくのであれば単に日本語教室だけでなく個別に支援をしている方がいるはずである。中野でも課題を抱えた外国人は多くいると思う。そういった国際交流協会との連携の仕方や民生委員との連携の仕方、そしてインフォーマルな所で言うとまだまだやりようはあるはずである。

委員：このケースのキーパーソンは母親である。娘に対するとともに、社会的な適応というところも含めて母親にアプローチをして母親を変えない限りこの状況は変わらない。母親に対するアプローチを頻繁にしていかなければこの状況は変わらない。

委員：ケースは異なるが、私の近所に台湾出身の方がいる。日本人の夫が亡くなり、日本の伝統的な葬り方を知らないので教えてほしいと相談を受けた。もっと近くに住む近所の方もいるが、外国人ということで近所の方が一段下に見るという感じがあり、その方は近所に相談することは難しいということで私の家は少し離れているが、相談があった。日本語が堪能ではないのでお金のことなど深い話になると少しすれ違う部分があった。そんなに日本式にこだわらなくても台湾式のやり方でもいいのではと言っても、日本の伝統はどうなのかということにばかりこだわっていて、不安なのだと感じた。夜でも電話をしてきたりして、相談に乗ってあげられることは乗ってあげられるが、家庭の中の事情などに一歩踏み込めないというところがある。

委員：しかしそのケースは委員がいたからよかった。

委員：だからそういう相談をすることが出来る人が近所にいてくれると良いと思う。このケースでも、そういうキーマンとなる方を近所で見つけるというのが一つの方法なのではないかと思う。

委員：母親にもっと自覚を持ってもらいたい。

局長：現在は自覚を持つ前の段階で非常に萎えている状況である。そこをじっくりと受け止める誰かに居てほしいし、それは日本語でなくてもいいと思う。国際交流協会などでも中野で暮らしている同じ国籍のコミュニティがあったとしても、いきなりそこへ行けと言ってもそこに居る方々の生活レベルの違いなどがあり、本人としてはそこへは行きづらいのではないか。まずは相談できるカウンセリングのようなどころにつなげてあげることが必要。また接触を避けるというのは、何か隠し事があるかもしれないので、本当にインフォーマルでそこなら安心して吐露してもいいというところを設けなければ、すべてを聞くことは無理なのではないか。社協など固い名称の機関が関わってもますます本人は固まってしまうのではないか。触れてほしくないところがありそうである。

事務局：そういう意味で言うと、近隣住民などといった関係の方がいいのではないかというのは私も思うところである。母親も日本人の夫との離婚を経ており、その辺りから何かあるのではないかと推測されるが、母親自身が話をしたがないため不明である。

委員：直接社協が訪問をしに行ってもだめなのではないか。

事務局：おそらく、長い時間をかけて関わらなければ難しいケースだと思う。

局長：貸付をしている関係で、長く関わらなければならない。その間にいろんな方々の支援をその中に織り込みつつやっていかなければ、社協だけでは難しいのではないかと思う。

委員：この母親に誰か頼れる存在がいればいいと思う。

委員長：精神的な抑うつや不眠の方にとっては正常な判断をすることは難しい。そこは一つのポイントだと思う。専門的なこともあるが、中野の中で社会的に孤立している方というのはかなり潜在的にいて、相談ができない状況にあるというところがポイントではないかと思う。

(3) 重点目標③「困ったときに助けあえる地域を作る」

地域福祉推進フォーラムについて

委員長：事務局より資料3について説明いただきたい。

事務局：地域福祉推進フォーラムの目的と平成26年度の実施内容について資料3を説明

委員長：一度やってみて、やり方は工夫してみるとよいと思う。パネリストがどのような活動に携わっているのかももう少しわかりやすくした方がよい。それから見た一般の方が関心を持ちやすいようなチラシの作り方の工夫はもう少しした方がよいと思う。意図的に来てもらう必要があるためである。

先日テレビで見たが、最近は高齢者の犯罪者が多く、18%にもなるという。万引きに関する犯罪件数は高齢者が少年のそれを上回っているという。一方、犯罪の中には介護殺人ということもある。つまり高齢者が社会的に孤立しているために罪を犯さざるを得ないという状況である。犯罪を行ってしまった人のケアと犯罪に至らないために予防するということが今後は非常に重要となってくる。このフォーラムのテーマにも関係してくるかと思うので、ぜひ委員の皆様にも出席していただきたい。次回はその報告もしていただきたい。では次回の日程について事務局からお願いしたい。

7. 次回の日程

平成27年1月29日(木) 14:00～16:00

8. 閉会

委員長：これにて閉会とする。